世田谷文化生活情報センター 生活工房オープニング事業（区制65周年記念）

1996年秋～1997年冬
わがまちの記録

# 写真展「三軒茶屋～まち・人・商い～」

世田谷通り　藤田政明

会　　期：**1997年4月6日(日)～5月11日(日)**
臨時休館日4月14日(月)・21日(月)・25日(金)

開催時間：**午前10時～午後7時　入場無料**

会　　場：**世田谷文化生活情報センター**
生活工房「ワークショップB」（キャロットタワー4F）

主　　催：世田谷文化生活情報センター くりっく
**生活工房**

共　　催：世田谷区

協　　力：三軒茶屋地元商店街・東京三軒茶屋ライオンズクラブ・有限会社 ポレポレタイムス社・株式会社 写真らしく

## ごあいさつ

館長
永井 多恵子

三軒茶屋は私にとっても懐かしい街です。小学校時代、級友の家を尋ねて農道そのままの曲がりくねった道を、迷いながら、時には半泣きになって歩いたからです。

昔ながらの雑然とした界隈のにぎわいと、自動車文明が容赦なく切り取ってゆくシンメトリカルな洋風化の軌跡がこの街にはあります。

「生活」と「文化」、そして「コミュニティ」を主題としたパブリック・スペース『世田谷文化生活情報センター』がこの地に誕生することは単なる偶然とは思えません。 特にこの“生活工房”部門では、くらしのディテールに創意をうながし、ひとりひとりのライフスタイルの創造につながる「暮らしのデザイン」を生み出す場として活用されることを願っています。

1997年４月

## 生活工房とは

**◎コミュニケーション&ネットワークづくり**
生活工房は、区民が参加・交流しながら新しいライフスタイルを創造する場として、コミュニケーションとネットワークを生み出すための事業を展開していきます。

**◎くらしから生まれる区民活動のサポート**
生活工房には、日常生活を見直す「ものづくり」や「メディアづくり」の設備があり、それらに関連する事業を行い、区民の活動をさらに発展させる可能性を提供します。また、多様な区民の活動分野を連携し、新たな活動を生み出すことを支援します。

**◎区政と区民活動の情報の提供**
世田谷区政の情報提供や、様々な区民活動の情報を広く発信することを支援します。

**◎国内・国際交流**
異文化理解のワークショップや国際ボランティア活動を学ぶワークショップや国内の市町村との交流事業を行います。

三軒茶屋のキャロットタワーにオープンした「世田谷文化生活情報センター」の『生活工房』です。

生活工房ではセンター開館のオープニングイベントとして、『三軒茶屋～まち・人・商い～』と題した写真展を開催しました。

この写真展は、三軒茶屋在住の方を中心とした約100人の参加者が、三軒茶屋の時を超えて息づく伝統や、時代とともに生み出される新しい息吹を100人100様の方法で撮影した作品を、写真家・本橋成一氏の監修による区民参加の写真展準備会（４回開催）によって編集したものです。

会場内には来場者も一緒になって楽しみながら三軒茶屋の「今」を考えることのできるコーナーもあります。再開発を機に今大きく変わろうとしている三軒茶屋を写真を通してあらためて見つめ直すことにより、三軒茶屋に対する愛着を深め、さらにはこのまちの持つ様々な問題を考えるきっかけづくりができればと思います。

今後も「生活工房」の様々な事業に、多くの方々のご参加とご利用をお待ちしています。

生活工房総括ディレクター
世古　一穂

# 撮影から写真展まで

三軒茶屋
～まち・人・商い～

この写真展は、区民100人がそれぞれの視点、方法で三軒茶屋のまちを撮影し、写真展を開いたものです。参加者たちは改めて自分たちのまちを見直し、まちの記録を残すことができました。

これに先立つこと５年前、世田谷区では『三軒茶屋100人の時間地図』という写真イベントを行いました。これは1991年11月１日の三軒茶屋を定点観測、あるいは、住民の１日をドキュメント形式で撮影し、翌年写真展を開いたものです。

今回のイベントはこれに連動するものです。今回は撮影から写真展開催まで、様々な指導を仰ぐために写真家・本橋成一氏を顧問に迎えました。

今後も変わりゆくまちを定期的に撮影し、わがまちの記録として残していきたいと思っています。

| | | |
|---|---|---|
| ◎よびかけ | チラシ、回覧板、区報など | ’96年8月中旬～ |
| ◎第1回 ワークショップ | 企画の説明、参加者初顔合わせの会 | 9月14日(土) |
| ◎第2回 ワークショップ | 撮影場所、ものを報告する会 | 10月5日(土) |
| ◎撮　影 | 参加者、まちの各所で撮影 | 10月6日(日)～20日(日) |
| ◎第3回 ワークショップ | 撮った写真を見せ合う会 | 12月8日(日) |
| ◎写真展準備会ワークショップ | 講評を聞き、準備をする会 | ’97年2月9日(日) |
| ◎予告展示 | 三軒茶屋2丁目会議室前に作品の一部を展示 | 2月17日(月)～ |
| ◎写 真 展 | 『三軒茶屋 ～まち・人・商い～』 | 4月6日(日)～5月11日(日) |
| ◎ミニイベント | 撮って、見て、語ろう三軒茶屋<br>スライドショー『三軒茶屋の歴史』 | 4月20日(日)<br>5月10日(土) |
| ◎記念講演会 | 対談『ふるさとを撮る』 ダムに沈む村を撮り続けた 増山たづ子氏<br>写真展顧問 本橋成一氏 | 4月27日(日) |

# 100人が100様の三茶を撮りました

## 第1回 ワークショップ '96年9月14日(土) 三軒茶屋2丁目会議室

### 本橋成一氏の作品スライド上映が好評

イベント開催の呼びかけに対し、100名弱の参加希望者があり、この日は２回に分けてワークショップを開きました。プログラムは、主催者および地元商店会からの挨拶、本イベントの顧問である写真家・本橋成一氏の講演と作品スライド上映、ボランティアスタッフの作った手書き地図によるまちの案内など。特にスライド上映は好評で、みんな熱心に見入っていました。また参加者には次回までにまちを散策し、月末までに撮りたい場所やものを報告するという課題が出されました。

## 第2回 ワークショップ '96年10月5日(土) 三軒茶屋2丁目会議室

### 仲間の撮りたいものを知り、撮影意欲に弾みがつく

この会合の前に、事務局では参加者からの報告を整理し、事前に撮影許可のいる所には交渉に出向きました。またボランティアスタッフは、参加者の撮りたい場所やものを集計し、一目で分かる撮影候補地の分布地図を作りました。

当日、参加者たちは２回に分れて集まり、撮影交渉の結果を聞き、また分布地図を見ながら仲間がどんなものを撮りたいかを確認しました。そして、自分もここを撮ろう、あそこは撮る人が少ないから撮ってみようなどと、撮影意欲を新たにしました。

帰りがけにはフィルム、撮影プレートなどを受け取り、翌日からいざ撮影です。

## 第3回 ワークショップ '96年12月8日(日) 三軒茶屋2丁目会議室

### 力作を前に撮影談義に花が咲く

ほとんどの参加者が11月上旬までに５点ずつの作品を提出しました。事務局ではそれを参加者ごとに台紙に貼り、整理しました。第３回はそれをお互いに見るための会です。作品の視点や、撮影状況をじっくり聞き合うために、この日は、５回に分けて会合をもち、さらに各回とも４、５人程度小グループに分れてテーブルにつき、参加者同士、交流を深めました。そしてどんな思いでその写真を撮ったか、撮影の時の苦労話、まちで見つけた新しい発見などに花を咲かせました。

## 写真展準備会 '97年2月9日(日) キャロットタワー5F セミナールーム

### 全作品を一覧、1人ずつ講評を受ける

いよいよ写真展を２か月後に控え、事務局では準備に拍車がかかってきました。この段階で、実際の展示に近い形で参加者に作品を一覧してもらおうと、写真展準備会を開きました。作品をテーマ別に分けて貼り出し、さらに本橋成一氏から参加者１人ずつの作品についての講評が行われました。

同じまちを撮ってもそれぞれ違う表情が出ているおもしろさをみんなで味わいました。そして、100人100様の作品で三軒茶屋が生き生きと浮かび上がる写真展に期待が膨らみました。



# 三軒茶屋点描

今回の写真展には、写真の経験の深い人、浅い人、また若い人、お年寄り、そして様々な職業の方が参加しています。しかし共通して言えるのは、みんな三軒茶屋のまちに熱い思いをもっているということです。

写真展のテーマはサブタイトルにもあるように、「まち・人・商い」です。三軒茶屋は、軒を連ねる商店街、のどかに走るチンチン電車、そして完成したばかりのキャロットタワー周辺にも人の息吹が感じられる温もりのある地域です。

そうしたまちを撮るにあたって、写真家・本橋成一氏を顧問として迎え、撮影から写真展開催まで様々なアドバイスをいただきました。氏は長年、生身の民衆像を追い続け、上野駅周辺や、築地などのまちをテーマにした作品も多くあります。また最近ではチェルノブイリの汚染地域で暮らす人々をテーマにしたドキュメンタリー映画にも着手するなど、幅広い活躍をしています。

本橋成一（もとはし せいいち）略歴

1940年　東京に生まれる
1963年　九州、北海道の炭鉱の人々を撮り始める
1968年　その作品「炭鉱、〈ヤマ〉」（現代書館）により第５回太陽賞受賞
1995年　チェルノブイリの人々を撮影した「無限抱擁」（リトル・モア）で、日本写真協会年度賞・写真の会賞を受賞

その他、民衆をテーマにした写真集『サーカスの時間』（筑摩書房）、『上野駅の幕間』（現代書館）、『魚河岸ひとの町』（晶文社）、『老人と海』（朝日新聞社）など著書多数。

下の谷商店街　本橋成一

キャロットタワーより　福島寿満

三軒茶屋交差点　佐久間孝

西太子堂付近　猪村誠介

世田谷公園　寺口由希子

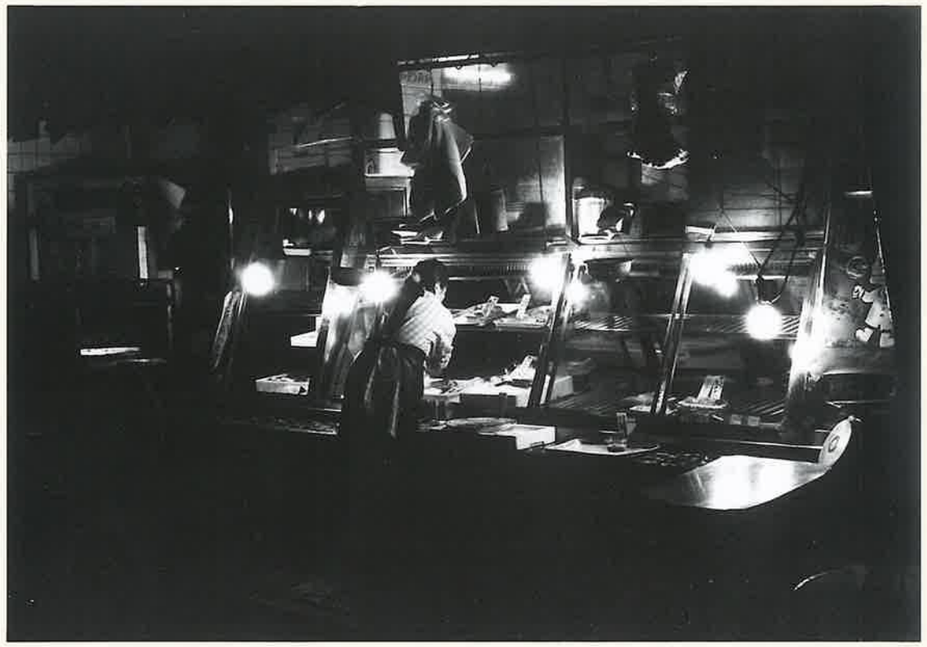
太子堂3丁目　増田駿次

三宿
小笠原真美

三軒茶屋1丁目　平野真美

太子堂中央街　佐々木仁平

太子堂5丁目　斎藤博子



三軒茶屋2丁目　松本大介

茶沢通り　宇野裕

# 三軒茶屋点描

烏山川緑道　篠宮哲夫

西武アムス前　岡野高光

三軒茶屋学童クラブ　槻谷順子

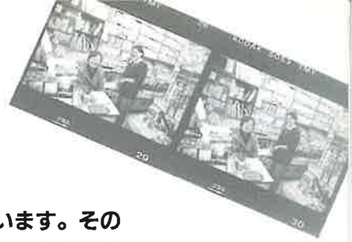
世田谷学園　浅海泉

太子堂商店街　大泉雅之

世田谷線踏み切り　陶山勉



# 三軒茶屋を語る



三軒茶屋のまちは、今、大きく変わろうとしています。そのまちを撮影し、写真展を開こうという今回の企画は、参加者をはじめ、被写体になった人、協力者など、多くの人が改めて自分たちのまちを見直し、まちについて考える機会となりました。

そこで、地元の方々に自分にとって三軒茶屋とはどういうまちか、今後どんなまちに育ってほしいか、また、撮影の時のエピソードなど、様々な思いを語っていただきました。

インタビュー

## 下町情緒と文化の薫るまちに

三軒茶屋商店連合会会長
朝倉守利さん（太子堂）

三軒茶屋交差点を中心におよそ半径1㎞以内の駅前地区に、500～600の商店があります。地域の広さからすると店の数はかなり多いほうでしょう。つまり小さな個人商店がビッシリ詰まっていて、それぞれ個性的な商品を売っているまちなのです。

そして店の人とお客さんが世間話のひとつも交わしながら買い物ができるというのがこのまちの特徴です。そうしたほのぼのとした下町情緒はこれからも残していきたいですね。

一方このまちは、そこに行くだけで何かワクワクするといった楽しさ、つまり、仲間と憩う、音楽や芝居を楽しむ、新しい発見があるなどの、いわば文化的側面に少々欠けているようです。今後はそうした面をプラスすることにより、三軒茶屋はもっと奥の深い、おもしろいまちになるのではないでしょうか。

このたび完成したキャロットタワーのなかには、区民の文化活動に格好のスペースや劇場もあります。商店街の人はもちろん、多くの区民がそれらを活用することにより、三軒茶屋は文化の薫るまちに成長するのではないかと、楽しみにしております。

撮影　須田正

## 農村からまちへと変わったあの頃

天台宗教学院住職
林　静寛さん（太子堂）

この寺は明治41（1909）年に青山から太子堂に移ってきました。江戸五色不動のひとつの目青不動の寺として、また小田原城主大久保家歴代の墓所として知られております。

私は大正3年にここで生れました。小さい頃の太子堂は農村地帯で、農家の人は米や野菜を人力車で渋谷に出荷し、帰りに肥桶をピチャピチャ揺らしながら戻ってくる毎日でした。

また烏山用水の堰に板をかって泳いだ思い出もあります。用水には水車がいくつもありましたが、特に三宿の「黒んぼ水車」は印象的。これは鉛筆の芯を作る水車で、働いている人まで真っ黒だったためそう呼ばれていました。

大正10年、第2荏原尋常小学校（現三宿小学校）に入学しました。ちょうどその年、寺の東側、今の世田谷幼稚園から太子堂4丁目にかけて、世田谷初の府営住宅140戸が建ち、学校にも都会の子供が入ってきました。その子たちが弁当に持ってくるコッペパンがうらやましかったな。

その2年後、関東大震災があり、下町から多くの人が引っ越してきました。まちは区画整理されないまま宅地となり、路地もたくさんできました。また、下町の風習も根付き、「山の手の下町」と呼ばれる独特の雰囲気が生まれました。住み心地のいいまちだと思います。

撮影　大泉雅之

インタビュー

## 三軒の茶屋の一つでした

田中屋陶苑
堀江婦久さん(太子堂)

撮影　富田賢博

江戸時代、国道246は丹沢大山へ参詣に行くための大山道という街道でした。そこに田中屋、信楽、角屋の三軒の茶屋ができたそうです。旅人や馬の休憩所として賑わっていましたが、田中屋は明治25年、焼けてしまいました。そこで大正10年から瀬戸物屋を始めたそうです。

私は昭和30年に嫁に来ましたので、瀬戸物屋になってからのことしか知りませんが、舅や姑からこの店が地名の起こりであることはよく聞かされました。今ではうちだけがこのまちで商売を続けています。古くからのお客さんが多く、遠くからも買いにきてくださるのは嬉しいですね。

## 区民と行政一体で烏山川緑道の自然を取り戻す努力をしています

烏山川緑道愛鳥の会代表
橋本一雄さん(三宿)

私は約40年前、三宿小学校の教員をしていました。その間、児童を連れてよく烏山川に行ったものです。昔は鳥がさえずり、鮒や鯉やザリガニがいましたが、20年前からすっかり汚れ、悪臭も立ち始めました。これをなんとかしなければと、12、3年前から自然を取り戻す運動を住民と始めました。そこで4年前から野鳥がやってくるような環境作りを考え、愛鳥の会を結成しました。野鳥は環境のバロメーターだからです。

行政と一緒に川を整備し、緑道を作り、清流を復活させる努力をしています。その結果、20種類以上の野鳥が飛来するようになりました。今後も自然と調和したまちづくりを行いたいと考えております。

撮影　照井恒衛

## 地域の子供たちの遊び場の核づくりをしたいですね

三軒茶屋学童クラブ指導員
小林一美さん(左)
玉川洋子さん(右・ともに太子堂)

学童クラブは、両親が仕事をしている子供たちが放課後、遊びを中心に過ごす所です。このクラブには太子堂小学校の1年生から3年生までの子供たちがやってきます。駅前地区なので商店のお子さんも多く、みんな活発。ボール遊びや一輪車乗り、お姫様ごっこなど、毎日大騒ぎです。家ではファミコンなど、一人遊びをしている子もここでは友達と遊ぶ楽しさを体中で味わっているのでしょね。

撮影　槻谷順子

この地域は子供たちが伸び伸びと遊べる場が少ないので、時には登録していない子供も呼び、地域の子供たちの遊び場の核になるような工夫もしています。

## 8年前から三茶を撮って

撮影　長岡周作

鉄道会社社員
佐久間孝さん
(池尻)

池尻で育った私にとって、子供の頃から見慣れた玉電が廃止されたのは大きな出来事でした。最終電車が走った昭和44年3月10日(日)、当時中学生だった私は大好きだったテレビ番組『巨人の星』も見ずにその最後の姿を撮りに行ったものです。その頃から電車を写すことに興味がわき、カメラをぶら下げあちこち歩きましたが、そのうち街を写すことがおもしろくなりました。

8年前からは地元三茶を撮っています。三茶は開発されても下町らしさ残っているところがいい。私は街の記録として、主に風景写真を撮ってきましたが、今回は下町の人情を撮ろうと人物のクローズアップにも挑戦しました。今までとは違う味の写真が撮れ、楽しい体験でした。

## スタッフからひとこと

この写真展には、企画の段階からボランティアスタッフに参加していただき、撮影説明会、写真展準備、ミニイベントの企画など、様々な場面で力を発揮していただきました。

**林田ゆみ子さん**(大学助手　三軒茶屋)

学生時代から三軒茶屋に住み始めて、もう11年になります。職場も住まいもこのまちですが、高速道路や、所狭しと並ぶ建物の織り成す風景に、少々うんざりすることもあります。でも、気がつけば人生の3分の1をここで過ごしているわけです。第2の故郷として、格別の愛着があることも確かですね。

いつかこのまちを離れることがあっても、ここであったこと、ここで出会った人、この風景をきっと忘れないと思います。

**槻谷順子さん**(フードスタイリスト　太子堂)

三軒茶屋の住民になって、丸4年が経ちます。島根県の商店街で生まれ育った私にとって、三茶の商店街はホッとできるまちです。だだ、若者が集まれる場所、30代くらいの人が憩える所が少ないですね。今の街にもう少し、お洒落なセンスがプラスされるといいなあと思います。

今回の写真展では、学童クラブの子供たちを撮りました。レンズを向けるとワッと寄って来る姿がとても可愛い。楽しい写真が出来上がりました。

三軒茶屋を語る



# 三軒茶屋(太子堂)今昔物語

撮影　村上雄一

| | |
|---|---|
| 文禄4年(1595) | 真言宗の僧侶、賢恵和尚が十一面観音菩薩像と聖徳太子像を背負って村に泊まったところ、夢に聖徳太子が現れて「この地に霊地あり」とのお告げを聞く |
| 5年(1596) | 本堂、聖徳太子堂、庫裏を完成させる。以後この村は栄え、太子にちなんで「太子堂」と名付ける |
| 万治2年(1659) | 玉川上水より分水して烏山用水を造る |
| 1800年代 | 江戸庶民の大山詣が盛んになり、大山道(現国道246号)の分岐点に信楽、田中屋、角屋の三軒の茶屋ができる |
| 文政9年(1826) | 太子堂村の民戸40戸 |
| 明治元年(1868) | 品川県の所属となる |
| 4年(1871) | 太子堂郷学所(現若林小学校の前身)開設 |
| 5年(1872) | 東京府に入る。戸数57、人口275人 |
| 22年(1889) | 池尻、三宿、太子堂、若林、下北沢、代田、経堂在家、世田谷の8村が合併して「世田谷村」となる |
| 31～32年(1898～99) | 太子堂の南部が近衛野砲兵連隊と野砲兵第1連隊の敷地の一部に繰り入れられる |
| 40年(1907) | 玉川電車開通、三軒茶屋駅開設 |
| 41年(1908) | 教学院、青山より移転してくる |
| 44年(1911) | 大山道に面して太子堂青物市場ができる |
| 大正9年(1920) | 第1回国勢調査。大字太子堂407世帯、1993人 |
| 10年(1921) | 三軒茶屋交差点の北野地域に東京府住宅協会が140戸の公営住宅建設 |
| 12年(1923) | 世田谷村から「世田谷町」になる<br>関東大震災 |
| 14年(1925) | 玉川電車の支線の下高井戸線(現東急世田谷線)開通 |
| 昭和4年(1929) | 第4荏原尋常小学校(現太子堂小学校)開校 |
| 7年(1937) | 世田谷・駒沢両町、玉川・松沢両村で「世田谷区」となり、太子堂は町となる |
| 19年(1944) | 国道246号沿いの商店、強制疎開させられる |
| 20年(1945) | 空襲で駅前通り、府営住宅、陸軍第2衛戍病院から淡島通りにかけて焼ける<br>昭和女子大、中野区より移転 |
| 22年(1947) | 太子堂中学校創立 |
| 39年(1964) | 東京オリンピック開催にともない、国道246号拡張、首都高速3号線開通 |
| 40年(1965) | 新住居表示の実施により、太子堂は1丁目から、5丁目までとなる |
| 44年(1969) | 玉川電車廃止 |
| 平成8年(1996) | 世田谷区一の高層ビル・キャロットタワー(地上26階地下3階)竣工 |

明治40年頃の三軒茶屋交差点の写真
(田中屋陶苑所蔵)

大正10年の太子堂界隈の地図
(教学院所蔵)

撮影　牛山喜晴

参加者（あいうえお順）

| | | |
|---|---|---|
| 天野　馨 | 佐々木仁平 | 長岡　周作 |
| 石倉みゆき | 佐藤　沙恵 | 橋本　一雄 |
| 石田　晶子 | 澤　由紀江 | 浜田　スエ |
| 板垣　善雄 | 篠宮　哲夫 | 浜野　邦司 |
| 稲見　一茂 | 柴田　宏 | 林　静寛 |
| 井上あゆみ | 島雄　昭子 | はらともこ |
| 猪村　誠介 | 島崎　恵介 | 平野　真美 |
| 今井　正子 | 菅原　安男 | 福島　和正 |
| 牛山　喜晴 | 鈴木　誠一 | 福島　寿満 |
| 臼倉　敏雄 | 鈴木　博子 | 藤田　政明 |
| 宇野　裕 | 須田　正 | 藤村　貞男 |
| 大泉　雅之 | 関　夏子 | 増田　駿次 |
| 大窪　正治 | 関根　陽子 | 松崎　和子 |
| 大塚　栄一 | 宋　美沙 | 松澤　悦男 |
| 大戸　順子 | 高田　一夫 | 松本　絵里 |
| 大野　章子 | 高橋　直裕 | 松本　大介 |
| 岡野　高光 | 高山都規子 | 南　龍樹 |
| 小笠原真美 | 竹谷　令子 | 幹田　薫子 |
| 加賀田　綾 | 田中　修 | 村上　雄一 |
| 木村　研吾 | 田中　一夫 | 森　謙一 |
| 木村　充男 | 田村　隆次 | 森中　大晴 |
| 源道　雅恵 | 鶴田　佳子 | 森中　広行 |
| 児玉　正実 | 寺口由希子 | 箭内　克俊 |
| 後藤　京子 | 照井　恒衛 | 横溝　尚行 |
| 斎藤　茂暢 | 富田　賢博 | 若山　治憲 |
| 斎藤　博子 | 豊田　悠子 | |
| 佐久間　孝 | 中村　甲 | |

八幡神社　木村充男

●ボランティアスタッフ
江頭紀子　江川瑠衣　陶山勉　槻谷順子　林田ゆみ子　薬師寺禎彦　山田理恵

●事務局スタッフ
神山真理　浅海泉　茅野礼子　佐藤由美子　明石雄介

●監修　本橋成一

●企画　生活工房

発行　1997年4月5日
世田谷文化生活情報センター
生活工房
〒150 東京都世田谷区太子堂4-1-4 キャロットタワー5F
TEL 03 (5432) 1543
FAX 03 (5432) 1559